



Title	意識の自己準拠：意識の超越論的哲学とシステム論の関係について
Author(s)	本間, 直樹
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1996, 30, p. 15-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4552
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

意識の自己準拠

—意識の超越論的哲学とシステム論の関係について—

本間直樹

我々は世界の内に生き、世界の内の出来事を観察する。そもそも観察という行いは、観察されるべき「対象」の存在を当の観察の仕方に負っている。世界は常に何らかの観点から観察されるのであり、観察者の視点は暗黙のうちであれ、表明的であれ既に選択されている。知覚体験において顕著に示されるように、世界は「ベースペクトイヴ的」に経験されるのであるから、観察者の視点はその偶因性 (Okkassionalität) ないし偶発性 (Kontingenz) から逃れることはできない。現象学の洞察が示しているのは、いかなる世界の観察（見ること）も観察者の存在の仕方に依拠するということである。

現象学の試みは、「世界」の意味を意識の経験に準拠する」とによつて問うることである。つまりフッサールは世界を意識の内に妥当する「意味」として捉え、世界の意味の根源を意識の内に求めるのである。この試みは世界の存在／非存在への問い合わせを括弧に入れ、世界の認識の可能性の条件を主觀性としての意識のうちに探るという点で「超越論的観念論」とも呼ばれる。しかしこの考察の注目すべき点は、世界を構成する意味の構造を明らかにする

だけでなく、そのような意味の「発生」の解明をも自らの課題としていることである。以下の論考では、意識を「超越論的主観性」として捉えるフッサールの試みのうちから「発生的分析」の成果を「受動的発生」を中心にして、その分析の意義を確認するとともに、さらにそらした意識の超越論的性質を「自己」準拠 (*Selbstreferenz*) という概念によって置き換え、「発生」の観点を社会的な意味の問題まで拡大しようとするニクラス・ルーマンの試みを検討する。

一 意識における意味の発生的構造

フッサールによれば、意識を構成しているのは（知覚や想像などの）諸体験である。諸体験はそれぞれ独立して互いに無関係に存在するのではなく、根源的現在にその起源をもつ「それ自身において生成の流れ」(III/1, 167) でありながら、「内的時間意識」の綜合によって「意識流」という統一的連関を構成すると考えられる。つまり、根源的な現在において産出された諸体験は、潜在性へと移行しながら「過去把持 (Retention)」の働きによって絶えずそのつどの現在的体験へと繋ぎ止められつつ、潜在性のうちに秩序だてて保存され、想起による体験の再生を準備する過去地平を形成する。そしてこの過去把持が「予持 (Protention)」の働きと結びついて「予期」が形成されることにより「未だない」といの仕方で規定された体験の未来地平が成立する。

したがって時間意識の働きは、意識の外部に実在する時間系列を「主観的」に写し取るのではなく、また体験を単に直線的な時間軸に沿って序列化するのでもなく、「意識が意識自身に関わっている」という意識の能動性と受動性を含めた自己関係性の最も基礎となる体験連関を受動的に構成することである。そしてこのような諸体験の連

関の形式的統一に基づいて内在的時間の構成、「キネステーゼ」による空間構成が行われ、さらにそれを基盤として能動的・受動的に発生した意味の指示連関が成立することになる。フッサールによれば、意識によつて捉えられる対象はそのものとして意識に内在するのではなく、多様なものを統一へともたらす意識の様々な段階での総合の働きのうちで能動的・受動的に発生する「意味」において「志向的」に意識に含まれると考えられるのである。

まず受動的発生の原理となるのが「連合」の働きである。「連合」とは、時間意識における諸体験の総合を基盤にしながら、「あるものがあるものを想起させる」、「あるものが他のものを指示する」(EU, 78)という内在的連関を形成する。連合の働きは「同質性と異質性による総合」(EU, 77)といわれ、等質なものどうしが融合し、異質なものどうしが対照を形成することによって様々な「感覺野」(EU, 78)が構成される。そしてこの多くの感覺野が様々に重なり合い、さらに総合されることにより複合的に構造化された知覚野が成立する。この知覚野においてはあるものが「際だつ」という仕方で様々な強度をもつて自我を「触発」し、その能動的な「注意」を促す。⁽¹⁾注意とともに知覚が始まり、知覚対象への「関心」が目覚める。この対象への持続的関心によつて、意識流のなかで知覚対象の様々な現出が統一的なものとして統覚される。さらにこの関心が目下与えられているものを超えてさらなる「余剰 (plus-ultra)」(EU, 87)志向する」とによつて、現に与えられているものとともに「地平」が喚び起こされる。その際、対象を様々な側面から規定し、知覚対象を可能な限り全面的に所与性にもたらすのに寄与するものが「キネステーゼ」の働きである。⁽²⁾

また、能動的総合によつて産出された新しい対象についての統覚的意味は意識流の潜在性に「沈殿」することによって「事物経験という類型」(XVII, 317)を創設し、「習慣性 (Habitualität)」として保存される。この統覚的

意味が連合によって「生ける現在」において覚起され、意味の「転移」を惹き起すのである。つまり、そのついで統覚された意味は時間地平の働きを介して「発生的な後への影響作用 (Nachwirkung)」(XVII, 317) を有しており、この影響作用によって「新しい類似の状況においていつのよう既に構成されて目の前にあるものが類似の仕方で統覚されね」(ibid.) たり、意味が想起されたりやるのである。」の」とかの統覚の働きには常に「一般に無規定であるが、類型的な仕方で規定されたものを類型的に予め馴染みのあるものとして予期す」(EU, 32) という予期の地平が関わっていることが明らかになる。

以上のように発生的分析によれば、意識（そして最も包括的な意味での「自我」）が「普遍的発生の統一」の「みんに結合された無限の連闊」(I, 114) をなして「しるい」が明らかにされた。つまり、意識流の顯在野において受動的・能動的に発生する対象の意味は体験連闊のうちに沈殿する習慣性と予期地平を介して再び意識に「発生的な」影響を与えていた。したがって意識のそのつまの（新しい）体験は「時間的に出現する体験固有の『歴史』」即ち「その時間的な発生」(XVII, 316) をもむかへその「歴史」／の指示、即ちそれが「本質上それに先立つ以前の他の形成体に基づいて後から形成されたものである」と（I, 112）を知らせる志向的指示を内含しているのである。

II 地平、経験の閉鎖性と開放性

以上でみたように、個々の体験は意識の顯在性の領野から潜在性の領野へと伸び広がる全体としての諸体験の連闊、意識流、「意識生」を構成して「る。また意識の顯在的経験はそれ自身で完結するのではなく、「自我を超えて可能な経験を指示示し、」の可能的経験自身もまた新しい可能的経験を指示示して「る」(III/1, 102)。しかも

この諸体験の連関それ自身が「生ける現在」において絶えず「流れつゝ」変化している。例えば知覚体験は、顕在的に知覚されている部分以外の知覚の可能性を指示する地平を有しており、意識はそのように指示された可能性を新しい知覚によって顕在化する」とによって対象の意味を流動的に規定する。したがって個々の体験は「その体験の属する意識連関の変化、およびその体験自身の流れの局面の変化に応じて変化する地平、つまりその体験自身に属する、意識の諸潜在性を指示する志向的地平」(I, 82)を有し、またそのように動的に変化する地平を介した指示の連関のうちでのみ対象の意味が形成されるのである。

地平意識の一般的な働きは「予描すること」である。「予描」は「それ自身常に不完全であるが、その未規定のうちに何らかの規定性の構造を備えていふ」(ibid.)といわれるよう、意識の過去地平、既知性に依拠して対象を何らかの意味において先行的に規定する」とである。来るべき新しい経験が常に過去に沈殿した意味に依拠して予めの意味的な規定を被るという点では、意識はある種の閉じられた経験の構造をもつといえる。「類型的に予め馴染みのあるもの」として予期された意味は、それが「充実」か「当てはづれ」かによって確証されたり規定の変更や追加が行われたりする。世界は常にこの先行的な意味化のなかでのみ、何ものか〈として〉意識に「与えられる」。「未知性はいつでも同時に既知性の一樣態である」(EU, 34)といわれるよう、意味は既知性と未知性の間である種の循環を形成していると考えられる。

しかし他方で、意識の経験は常に世界内の対象を様々な観点から別様に規定する可能性を保持しているという点で、経験の可能性に対しても無限に開かれている。意識のそのつどの経験はそれ自体で完結することなく、絶えず「別の」、「それ以上の」可能性に対して開かれ、常に「意味の超越」という事態」(EU, 30)に晒されている。いま

り「どのような規定も最終的なものではなく、現実に経験されるものは同一物に関する可能的経験の地平を常に無限にめぐらし、（EU, 27）のやあり、また同一的対象もともに与えられる対象との関係づけによって新しい意味を獲得する。したがって意識は諸対象相互の意味の連関、即ち規定可能性の地平を辿っていくことによって、最終的に「世界地平」へと開かれていく。世界とは、個々の経験の諸可能性の地平を包括する最終地平および「普遍的地盤」であり、「個々の認識行為のすべてにとつて前提となる普遍的受動的存在信念」（EU, 24）として働く「世界意識」の相関項をなすとされる。

以上のように地平意識の分析は、既知性と未知性、顯在性と潜在性（可能性）の間に成立する指示の連関を意識がそのつど移行しつつ顯在化することによって世界および世界的なものの意味が継続的に形成されることを示している。注記すべき点は意味というものが個別対象に関する意味に留まらず世界地平へと伸び広がる発生的な指示の連関として考えられることである。多様なものを統一にもたらすという意味での意味化の働きは統覚に限らず意識の各段階で成立しており、しかもある意味はそれがまた別の意味を再び指示するという意味の連関のなかではじめて解明されるのである。また意味の形成は常に他の意味形成を前提し、その点では意味の産出はつねに（類型的予期による）意味の再産出の契機を含んでいる。しかも意味連関は顯在性と潜在性、既知性と未知性の間で絶えず変動しながら「一律調和性（Einstimmigkeit）」（XVII, 242）を保つてゐると考えられる。その結果、意味を欠くものに意味を付与するという狭義の主觀の役割は極度に限定され、伝統的な意味での構成的主觀性という考え方を超えていく契機がフッサールの分析のうちに見出されるのである。

三　自己準拠システムとしての意識

意識の自己準拠

意識は、『イデーン』において明確に「それ自身で閉じたひとつの存在連関」(I, 105) と語られるように、世界の意味が意識の内で発生し、世界が意識の内で予めの意味的な構造化を経て与えられるという点で世界に対し閉じている。イリヤ・スルバールは、このような「超越論的主觀性」としての意識の「閉じられた構造」に着目し、「[この閉じられた構造の] 働き (Leistung) によって、世界地平の諸可能性の無限性が見えるようになり、それが互いに意味的に関係づけられた指示連関として現れる」⁽³⁾、即ち、意識は世界の意味が汲み尽くされない仕方で意識の内に発生的に含まれ、指示されているという点では世界の経験に無限に開かれていると述べている。スルバールはこのように意識の閉鎖性が可能性地平、世界地平への開放性の条件をなすと考える視点をルーマンのシステム論のうちに見出している。スルバールによれば、フッサールの意味の発生という考え方には従来の主觀性概念を超える契機が含まれており、ルーマンはそのような契機を自ら展開することによって主觀性に代わる新しいシステムの概念を提起しているという。⁽⁴⁾

ルーマンはフッサールの意味についての理論を抽象的に一般化することによって、自己準拠的な意味のシステムという概念を取り出す。ルーマンは先にまとめた意識における意味形成の働き、即ち意味が絶えず受動的に発生した意味連関のうちで形成され、顯在性と可能性の地平を介してある意味が別の意味を指示するという働きに注目し、それを意味の「自己準拠」ないし「自己指示」(Selbstreferenz) と呼んでいる。⁽⁵⁾

彼によれば、このような意味の指示には「現実的なもののみならず、可能的なものと否定的なものが含まれて」

おり、「意味によって意向された対象を起点とする指示の総体は、次の時点で実際に顕在化され得る以上のものを暗示する」(SS, 93f.) となる。そして、意味形成は地平において呈示される「諸可能性の継続的な顕在化」(SS, 100) であり、意味は「まさにその時点で顕在的なものと可能性の地平との差異としてのみ意味であり得る」と解釈される。フッサールが示したように諸対象の規定さるには世界の意味的な規定は決して完結することがないゆえに、それぞれの可能性の顕在化は「常にそれに接続可能な諸可能性の潜在化」(ibid.) つまり常に新しい可能性の地平の形成を伴う。意味が「自己準拠として機能する」といわれるのは、「規定されたものが常に規定されたもの地平において規定可能であるように、意味は意味のみを指示し得る」という意味においてである。意味は常に更なる意味を指示しており、意味の領域が踏み越えられることはない。ルーマンは「の事態をフッサールに依拠して次のように述べてゐる。「(ル)のよくな指示の循環的な閉鎖性 (Geschlossenheit) はある意味の最終地平としての、即ち世界としての統一性のうちに現れて いる。」(SS, 105)

以上で明らかのようにルーマンは「意味のシステム」(SS, 64) という概念によつて「対象に意味を付与する主観」という図式を放棄し、意識を、意識を構成する諸体験は諸地平を介して再び体験を指示するという意味で自己指示的、自己準拠的システムであると考える。ルーマンが意識を自己準拠的システムと見なすのは、意識が、「意識を意識によつて再生産するのであり、その再生産に関しては自分自身に準拠するのであり、したがつて意識を外部から維持したり、意識を外部に向けて発信するのではないシステム」(SS, 355) と考えられるからである。ルーマンは「のような「システムを成り立たせる要素をそのシステムを成り立たせる要素そのものによつて生産し再生産するシステム」(AB, 403) の自己準拠的機構を「オートポイエーション (自己創出)」とも名付けて いる。⁽⁷⁾

）のオート・ポイエーシスという考え方はフッサールの超越論的意識とのように対応するのだろうか。オート・ポイエーシスを自己構成と解するならば時間意識の自己構成、受動的綜合での感性野の自己構成、そして超越論的自己の自己構成がそれにあたるが、最後の自己構成に関してはフッサールは意識が「生ける現在」において絶えず流れつい、自己の差異化と統一化を反復していると考えたのに対し、意識のオート・ポイエーシスという観点からすれば、意識の統一性は意識内容の絶えざる自己生産によってのみ再生産されるのであり、その意味で意識は絶えず意識を継続的に産出することによってのみ自己であるようなシステムであるとされる。ただしルーマンはこのオート・ポイエーシスと、う自自己産出のプロセスを、（フッサールに言及しつゝ）システムによるシステム固有の時間と歴史の生成と考え、このプロセスが意識の「個体性」をなすと考へる（SS, 373）。これはフッサールが「モナドの個体化」（XIV, 35）による概念によつて示してゐるよろに、根源的に流れる意識が「時間化」（XV, 375）によつて自己を個体化し、「モナドの生ける統一」、即ち歴史の統一」（XIV, 36）を形成するという考へに類似している。

またルーマンは意識において様々なレヴェルで自己準拠が成立すると考へる。先に述べた構成素のレヴェルでの自己準拠の他に、意識が何かを表象するといふときには「觀察の自己準拠」（ibid.）が成立するという。オート・ポイエーシスの観点からすれば意識において意識（表象）されたものはすべて意識（によつて産出されたもの）であるが、意識されたものは意識ではない何ものか（対象）として指示されるといふと、「何ものかについての意識」として、即ち意識自身としても指示され得る。この場合、自己準拠は常に同時に「他のものへの準拠（Freudrefenz）」を伴つてじぶん考へられるのであり、「何ものかについての意識」という志向性の構造は「自己準拠と他者準拠の差異の統一」（AB, 411）として理解される。意識は「自己準拠と他者準拠の差異」に基いて意識を

れたものを意識自身として指示するか、意識ではないものとして指示するかによって自己と世界とを区別することができる」とになる。したがつてルーマンによれば、「反省」とは自己準拠と他者準拠の差異の統一に基づいたそれ自身高次の自己準拠と見なされるのである。自己準拠的システムは、システム相関的な世界（ルーマンはそれを「環境（Umwelt）」¹²と呼ぶ）と自己自身とを自ら区別する「自己」と世界を観察するシステムなのである。

四 世界の多中心性

以上において意識を超越論的主観性と解するフッサールの試みと、そのシステム論的な修正としての意識を自己準拠システムとして解釈するルーマンの試みが示された。しかし意識構造の具体的分析という点ではフッサールの分析の精緻さに比べ、ルーマンのそれはまだ理論的素描にとどまると言わざるを得ない。というのも、ルーマンにとっての最終的な課題は超越論的主観性を自己準拠システムと解体することによって「非主観的な（asubjektiven）意味構成」¹³、即ちコミニケーションを構成素とする社会システムにおける意味構成を問題にする」とあるからである。

そもそもオートポイエーシスという概念は様々なシステムの共存を前提としている。ルーマンは「意識」という諸システムの間ではいかなる直接的接触もあり得ない」と考え、この意識の自己準拠的閉鎖性を前提する」とによつてコミニケーションが意味を構成する自己準拠的なシステム、即ち社会システムとして成り立つと考えるのである。ルーマンは、フッサールの超越論的現象学は意識のみを世界の意味の発生の中心と見なすことにより、世界の間主観的構成という困難な課題を背負うことになったと考える。スルバールが指摘するように、フッサールは既に

個別的経験主観に還元不可能な意味の生起の（間主観的）「普遍性」を考慮に入れ、「意味を創設する構造」としての超越論的意識の不死性と無限性⁽¹⁴⁾を構想した。しかしひルーマンはそのような意味生起の普遍性を意味概念の「脱主観化」を試みるにむけた「カインシヨンにおける社会的意味の発生のうわに問ひ、世界の意味の生起、即ち世界の意味の多中心的構成を経験的な意識と意識の経験を超越するカインシヨンの両側面からの問う」という問題設定に置き換えたのである。

注

本文中の（ローマ数字、アラビア数字）の表記はすべて『ハッサール全集』のものであり、それぞれ巻数とページ数を示す。それ以外のハッサールの著作およびルーマンの著作の引用はすべて以降の略号を用いて表示する。

EU: E. Husserl, *Erfahrung und Urteil*, hrsg. von L. Landgrebe, (Felix Meiner) 1972

SS: N. Luhmann, *Soziale Systeme, Grundriß einer allgemeinen Theorie*, (Suhrkamp) 1984

AB: N. Luhmann, "Autopoiesis des Bewußtseins", in *Soziale Welt* 36, 1985

(1) Vgl. EU § 17.

(2) ibid. § 19. 云々『経験の判断』やは様々な意識の能動性が分析的分析され、本論ではそれを省略する。

(3) I. Stüber, "Vom Milieu zur Autopoiesis. Zum Beitrag der Phänomenologie zur soziologischen Begriffsbildung", in C. Jamme und O. Pöggeler (Hg.), *Phänomenologie im Widerstreit*, (Suhrkamp) 1989, S. 325f.

(4) Vgl. ibid. S. 318ff.

(5) ハーマンズ〈Referenz〉は「記載」や「指し」の意義によつて使用されるが、云々では文脈に応じて「記載」や「指し」の意味をもつて用いられる。

(6) A. Nasschi, "Wie wirklich sind Systeme? Zum ontologischen und epistemologischen Status von Luhmanns

による研究成果」の一部である。